

## ヤンゴン工科大学に招聘され、建物被害評価に関して講義を行いました（2013/12/16）

テーマ：建物被害評価、ハザードマップ  
場所：ヤンゴン工科大学（ミャンマー連邦共和国、ヤンゴン）

ヤンゴン工科大学（Yangon Technological University (YTU)）は、ミャンマー国内で最も歴史のある最大規模の工科大学で、建築や土木の分野を含めた 18 の工学専門分野で構成されています。同大学に災害科学国際研究所から村尾修教授（地域・都市再生研究部門 国際防災戦略研究分野）が招聘され、12月16日（月）から18日（水）にかけて講義ならびにヤンゴン市街地と建築物の現地視察を行いました。

訪問初日には、学生を対象として、村尾教授の博士論文の研究テーマでもある、「兵庫県南部地震の実被害データに基づく建物被害評価」に関する講義を行いました。内容は、兵庫県南部地震による建物被害データを用いた建物被害関数の作成過程や、それに基づく都市の脆弱性評価についてでした。2日目は、ヤンゴン市内に立地する建物の特徴について調査し、また町の様子も視察しました。3日目は、ヤンゴンにおいて今後どのようにハザードマップを作成すべきか、ということについて学生等と話し合いました。ハザードマップとは、自然災害による被害を予測し、その被害範囲を地図化したもので、予測される災害の発生地点、被害の拡大範囲および被害程度、避難場所などの情報が地図上に図示されているものです。ハザードマップを利用することにより、災害発生時に住民は迅速、的確に避難を行うことができるため、災害による被害の低減に非常に有効です。

ミャンマーでは、2008年のサイクロン（ナルギス）や2012年の地震などの自然災害が発生しており、村尾教授がハザードマップの重要性について伝えました。

3日間の訪問を通して、自国の防災について関心をよせ、熱心に研究している学生達と活発な討論、意見交換がなされ、実りある訪問となりました。村尾教授より、「日本とミャンマーでは建物の構造や法律も違うため、まずミャンマーの建物の構造について調査、把握する必要がある。一概に日本の防災システムを適用できるとは限らないが、これからも引き続きミャンマーの防災をお手伝いしたい。」と述べました。



講義の様子



村尾教授とヤンゴン工科大学教職員・学生